

# 西本願寺本系業平集と東山御文庫本業平朝臣集

鈴木 隆司

## 一 はじめに

業平集の写本のなかで、西本願寺本系統の本は最も数が多いが、その多くは西本願寺本と配列を同じくする五十八首本であり、配列・歌数の異なる異本は極めて少ない。現在知られているものとしては、六十四首の歌をもつ東山御文庫蔵業平朝臣集（以下「東山御文庫本」と、五十五首の歌をもつ永和二年奥書藤原為敦筆本<sup>①</sup>）の二本があるのみである。

このうち、東山御文庫本に関しては、既に田中宗作氏<sup>②</sup>、

杉谷寿郎氏<sup>③</sup>をはじめ諸先学が明らかにされている通り、現存本は江戸時代初期の書写ながら、原本に極めて忠実に書写していると思われることや、平安末期の書写とされる伝公任業平集切に歌の配列、詞書が極めて近似していることから、かなり淵源の古いものであることが知られている。取載歌・配列の一致から、この本が西本願寺本系の本から派生したものであることがこれまでも言われているが、まずは確認のため、西本願寺本と東山御文庫本の配列の比較を一覧にしてみる。

5	4	3	2	1		西本
5	4	3	2	1		東山
1		1	1	1	9	8
3		2	1	0		
1	1	1	1		6	8
3	2	1	0	9	0	
2	2		1	1	1	1
1	0		9	8	7	6
2	2	2	1	1	1	1
2	1	0	9	8	7	6
3	2	2	2	2	2	2
0	9	8	7	6	5	4
3	3	2	2	2	2	2
1	0	9	8	7	6	5
3	3	3	3	3	3	3
9	8	7	6	5	4	3
4	3	3	3	3	3	3
0	9	8	7	6	5	4
4	4	4	4	4	4	4
8	7	6	5	4	3	2
4	4	4	4		4	4
7	6	5	4		3	2
5	5	5	5	5	5	5
7	6	5	4	3	2	1
5	5	5	5	5	5	5
6	5	4	3	2	1	0
6	6	6	6	6	6	5
4	3	2	1	0		9

7	6
7	6
1	1
5	4
1	1
5	4
2	2
3	2
2	2
4	3
3	3
2	1
3	2
3	3
4	4
1	0
4	1
5	4
0	9
4	4
9	8
5	8
8	5
8	7

表に見る通り、いくつかの歌の出入りはあるが、両集に共通する歌の配列はほぼ一致していると言つてよい。

それでは、東山御文庫本と西本願寺本の関係はどのように考えるべきであろうか。この問題を考えるにあつては、歌の配列と出入りに加えて、両集の詞書にかなりの異同がある点も考慮に入れておかなければならない。この点に関しては、これまでに、田中宗作氏の「増補改訂の際第一次資料になつたものは古今和歌集・後撰和歌集であつて、伊勢物語・他の異本類とはさほど深い関係をもつものではない」という指摘と、渡辺泰宏氏の「東山御文庫本が五十八首本の詞書を古今集、後撰集などによつて修正したことによつて両集に多くの異同が生じ、また、五十八首本において詞書のないこの四首に限つては、古今集、後撰集によるしかなかったためにこれら四首が古今集、後撰集に近い詞書になつたとしか考えられない」という指摘がある。田中氏・渡辺氏とも、両集の歌の出入りと詞書の異同を検討された上で、結論自体は、東山御文庫本は西本願寺本を原拠とし、古今集・後撰集によつて、加えるべきと考えた歌は加え、改めるべきと考えた詞書は改めたという点で共通しているようである。

一方で、西本願寺本と東山御文庫本の関係を直接論じたものではないが、山田清市氏<sup>(5)</sup>は、「月やあらぬ」「からころも」などの歌の詞書について、古今集荒木切の本文と業平集諸本の本文を比較され、この中で東山御文庫本が荒木切に最も近い本文を有していることを示し、さらに業平集諸本、とりわけ東山御文庫本が原古今集の本文を伝えている可能性が高いことを示しておられる。しかしながら、山田氏の示された例とは逆に、

はるくきぬるたびをこそおもへ

(古今・荒木切四一〇)

はるくきぬる旅をこそ思へ

(西本五六)

はるくきぬる旅をしぞおもふ

(東山五五)

と、荒木切が西本願寺本と一致している箇所もあり、西本願寺本・東山御文庫本と荒木切の距離の遠近は一概には言えない。山田氏はこのような例も併せて、現存古今集よりもこれらの業平集の本文が古今集の原形を示していると考えておられるようであるが、この荒木切の本文の信頼性にも問題はあり、現存業平集と古今集の原形をつなげることは、現状ではやはり困難と考えざるを得ない。

西本願寺本と東山御文庫本の二本について考えると、東山御文庫本にあつて西本願寺本にない二首「しるしらずなにかあやなく」(一一二)、「おぼろけのあまちはかづく」(二〇〇)は共に贈答歌の返歌であり、西本願寺本にあつて東山御文庫本にない二首には共通した特徴がない。確かにこの点からすれば、東山御文庫本の増補改訂と考えた方がわかりやすい。また、西本願寺本は四一〜五二がまとめて詞書を省いているが、東山御文庫本は、「ひとのもとにしばくまかりけれ□あひがたきけしきにはべり」(四二二)、「思ふところありて大政大臣よませて侍ける」(四七七)と、詞書を伴っている歌があり、しかもこれらの詞書が後撰集に近似していることからすれば、西本願寺本がわざわざこの二つの詞書を省いたとは考え難く、やはり、ここでも東山御文庫本の詞書の増補を考えるのが自然であろう。

## 二 詞書の異同

まず、西本願寺本と東山御文庫本の次の詞書の異同から考えてみたい。

紀のとしさだがあはのかみになりてまかりけるととき、：  
： (西本四〇)

紀のとしさだがあはのすけになりてくだりけるととき、：  
： (東山四一)

この「かみ」と「すけ」はどちらが原形なのであろうか。西本願寺本系諸本<sup>二〇</sup>のなかに「すけ」とするものは見出せない。古今集は現存するほとんどの本が「すけ」であるが、元永本には「かみ」とある。東山御文庫本が古今集の詞書に従つて「すけ」と改めたとも考えられるが、西本願寺本が東山御文庫本を派生させた後、元永本のような詞書をもつ古今集によつて改めたとも考えられる。これだけではどちらがどちらとも言い切れないのであるが、ここで注目されるのは、東山御文庫本と同じく西本願寺本系統の本から派生したと考えられる在中将集<sup>二一</sup>が、東山御文庫本と同じく「すけ」という本文をもっているということである。東山御文庫本と在中将集が共に西本願寺本から派生したものであるという仮定の下では、むしろこの可能性の方が高いと考えられる。少なくとも、東山御文庫本の増補改訂というだけでこの詞書の異同を考える訳にはいかない。

このように、東山御文庫本・西本願寺本・在中将集の三本の詞書について、東山御文庫本と在中将集は一致し、西本願

寺本がそれとは異なるという箇所を少なからず見出すことができる。これを一覧にすると【資料1】のようになる。これらのうち、例えば「十一日の月……」（東山三二）、在中五六）などは、古今集・伊勢物語にも見ることができ東山御文庫本・在中将集がそれぞれ別々に古今集、あるいは伊勢物語に接触して詞書を改めたと考えてもそれほど不自然ではなく、詞書の前後関係ということには必ずしもつながらないが、一方で詞書の前後関係に示唆を与えると考えられるものもいくつかある。それらについて検討していきたい。

① かへし、をんなにかはりて、なりひら

返し、女にかはりて

(西本一四)  
(東山一四)

「なりひら」の有無のみの異同である。西本願寺本系諸本では、群書類従本が「なりひら」を欠いているが、それ以外の本には「なりひら」があり、東山御文庫本には「なりひら」がない。また、在中将集にも「なりひら」がなく、東山御文庫本と一致している。この詞書を見て最初に考えることは、業平集の詞書になぜ業平が詠んだものであることを記す必要があるのかということである。この詞書に続く歌は、藤原敏行が業平のもとにいる女に贈った歌の返歌とされている「あさみこそ」の歌であるが、「女にかはりて」だけでも、業平が女の代作をしてこの歌を詠んだのだという事情は十分に伝わる。「なりひら」の詞書は、その歌は業平が詠んだもので

あるということを念押ししようとしたものであろうが、同じように業平が女の代作をした「かずくく」の歌(西本三六、東山三七、在中六一)の詞書を含めて、このような詞書が西本願寺本・東山御文庫本・在中将集のいずれにも、他には見ることができないことを考えても、これが原形とは考えにくい。西本願寺本が東山御文庫本を派生させた後に行った改訂と考えるべきであろう。

② きさいのみやの五条のにしのたいのにしのつまにすむ人を忍びてものいひはべるが、……

(西本一七)

五条のきさいの宮のにしのたいなる人にしのびて物いひはべる、……

(東山一七)

西本願寺本系諸本のなかには、陽明文庫蔵本、京都大学附属図書館蔵谷村文庫本など、「にしのつまに」の「にしの」を欠いて「つまに」とする本もあるが、「つまに」を欠く本文は見出せない。一方で、この「(にしの)つまに」は東山御文庫本にも在中将集にも含まれていない内容である。また、古今集(七七七)の詞書には、

五条のきさいの宮のにしのたいにすみける人に……

とあり、伊勢物語(四段)には、

昔、東の五條に大后の宮おはしましける、西の対に住む人ありけり。……

とあり、現存本を見る限りでは、古今集・伊勢物語の諸本の

みならず業平集諸本にも、西本願寺本系諸本を除いては、「(に)しの(つまに)」という内容をもつものを見出すことができない。

ところで、この詞書は「月やあらぬ」の歌の詞書であり、伊勢物語では二条后関連の章段に属するものである。歌自体も非常に有名であり、伊勢物語のなかでも中核をなすような章段である。そのことを考えると、西本願寺本の「(に)しの(つまに)」という詞書が発生した事情もおぼろげながら見えてくるように思える。もともと「西のたいなる人」もほかした書き方ではあるが、二条后を暗に示すものであるように読まれている。それに対して、皇妃となる二条后が入内前に業平と関係があつたということはあつてはならないと考える人もいたであろう。あつてはならないからなかつたのだとしてしまう人もいたであろう。西本願寺本の編者がそのように考えたのであれば、業平と関係のあつた女が二条后ではないことを強調しようとして「(に)しの(つまに)」という言葉を加えて加えたと考えられるが、「端」を意味する「つま」を加えればそれは二条の後ではないと思わせることができる。そのように考えれば、このような詞書の異同が生まれる余地は十分にあると考えることができるのではないだろうか。西本願寺本の詞書にそうした姿勢が窺えると仮定するのであれば、次の詞書の異同についても同じようなことが考えられる。

③ あるひと (西本二三)

いとわりなくしてあひし口はべりける女の、いとあさましきことなどいひて (東山二四)

「君や来し」の歌の詞書であり、これも伊勢物語で有名な、伊勢斎宮関連の章段(六九段)に含まれる歌である。ここでも在中将集は「いみじうわりなくてあひたる女」(四八)という、東山御文庫本に一致しないまでも近似した詞書をもっている。それに対して、西本願寺本はただ一言「あるひと」であり、大きく異なっている。同じ歌について、古今集(六四五)の詞書には、

業平朝臣の伊勢のくににまかりたりける時、斎宮なりける人にいとみそかにあひて又のあしたに人やるすべなくて思ひをりけるあひだに、女のもとよりおこせたりけるとあり、在中将集と東山御文庫本に共通する「わりなし」も、西本願寺本の「あるひと」も含まれていない。非常に長文になるので、引用は省略するが、伊勢物語の本文にも「わりなし」「あるひと」は含まれていない。現存する古今集・伊勢物語の諸本について、このことは同様である。現存しない古今集・伊勢物語に「わりなし」という表現があり、東山御文庫本・在中将集がともにそのような本によって別々に改訂されたという可能性は完全に否定できる訳ではないが、やはり極めて低いように思われる。むしろ、西本願寺本が「わりな

く」という詞書から齋宮犯しの禁忌を想起することを嫌って「あるひと」に置き換えをした考える方が自然ではないだろうか。

④ むかしふかくさといふところにすみける……(西本三七)

ふか草の里にすみ侍て……

(東山三八)

東山御文庫本にも在中将集にもない「むかし」が西本願寺本には存在している。同様に西本願寺本のみ「むかし」で始まる詞書の例が「人知れぬ」の歌(西本二二、東山二三)にも見られるが、いずれの例にしても歌集の詞書としては異例の書き方であり、「むかし」を含んだ形を原形とは考えにくい。伊勢物語の本文に影響されて西本願寺本がこの箇所を改訂したのであろう。

東山御文庫本と在中将集に共通し、西本願寺本系諸本と異なる詞書に関しては、以上のような例から考えれば、東山御文庫本の増補改訂というだけでは両集の詞書の異同に説明がつかない。むろん、田中氏、渡辺氏が示されたように、東山御文庫本が古今集・後撰集によって詞書を改めたと思われる箇所が多いことは否定できないが、逆に、現存する西本願寺本が改訂を受けたものであり、東山御文庫本が古い形の本文をとどめていると考えられる箇所も少なからず見られるのである。西本願寺本と東山御文庫本の詞書の異同については、

東山御文庫本の改訂と一方的に考えるべきではなく、逆の可能性を考えなければならない場合もあるということになる。歌の増補と詞書の増補・改訂は、一応は分けて考えておくべきであろう。また②③で考えたような西本願寺本の詞書の改訂は、当時の伊勢物語享受のあり方の一端を垣間見せるものであるように思えるが、この点に関しては稿を改めて考えてみたい。

### 三 東山御文庫本の増補歌

最初に表に見た通り、東山御文庫本には巻末に西本願寺本にない歌がまとまって存在しているが、これもこれまで言われているように、古今集・後撰集による増補と考えられるのだろうか。このことを疑問に感じるのは、第一に、五八〜六四の七首のうち、古今集・後撰集で業平の歌とされているのは「ちはやぶる」(六〇)の歌一首だけであり、他は全て他人の詠であること、第二に、その「ちはやぶる」の歌が然るべき場所(西本願寺本では九。西本願寺本との共通歌で、配列が異なるのはこの一首のみである)になく、このような場所にある理由が判然としないことがあるからである。仮にこれら七首が古今集・後撰集によって補われたと考えるにしても、贈答歌の返歌二首(一一、二〇)とは、増補された箇所も違うし、補われた歌の性質も違う。東山御文庫本に近似す

る伝公任筆業平集切が、五八、六四の部分に關しては一葉も存在を知られていないことも考え併せると、やはりこれら七首は、一、五七の部分とは別に考えておく必要があるだろう。

そこでまず、東山御文庫本の五八、六四のうち、六〇「ちはやぶる」を除く六首について他集との比較をしてみると、

【資料2】のようになる。一見して明らか通り、東山御文庫本増補部は、小相公本<sup>(三)</sup>にもつとも近い。東山御文庫本増補部にある歌は全て小相公本にあり、その配列も一首(東山六三)を除いて一致している。また、詞書の有無も、小相公本八三の「返し」を除いては全て一致し、詞書のあるものに関しては、完全に一致しないまでも、ほとんどが近似している。「おなじこと侍しにしがにまかりて」(東山六三)と「おもふ事侍しにしがにまかりて」(小相九七)は、「おなじ」と「おもふ」との相違はあるが、「はべりしに」という、現存する資料では他には見られない一致が見られる点は注目しておいてよいだろう。また、東山御文庫本六四の詞書と小相公本一〇九の詞書は、後撰集、あるいは伊勢物語を原拠にして省略を行ったと思われるが、原拠がいずれであるにしても、東山御文庫本・小相公本の省略の仕方が非常に似通っており、やはり両集に何らかの關係があることを思わせる。

以上のようなことに加えて、これらの歌が「つゐにゆく」(五七)の歌の後にまどまって存在していることを考え併せると、東山御文庫本は、御所本業平集と同じように、他の業

平集と校合し、歌を増補することによって成立したものである可能性が考えられる。すなわち、現存する東山御文庫本は、「つゐにゆく」の歌までの、西本願寺本とほぼ同一の配列をもつ五十七首本(これを仮に「原東山御文庫本」とする)に、小相公本と何らかの關係があるであろう集(その本は、小相公本との歌数の違いを考えれば、西本願寺本から在中将集・小相公本へ至る過渡的なものであるかもしれない)を校合し、七首の歌を増補したものであるということになる。そのように考えれば、「ちはやぶる」(六〇)がこの位置にあることにも説明がつく。おそらくは、原東山御文庫本で誤写などにより脱落したこの歌を他の業平集との校合によって巻末に補ったために、この歌だけが西本願寺本と大きく違う配列になったのであろう。「ちはやぶる」の歌が小相公本での位置にあったのかは、現存の形態からは分からないが、在中将集と小相公本が現存する部分に關しては配列がほぼ一致していると考えられる<sup>(三)</sup>ことから、「たのめつゝ」(八八)の歌の直前、現存の御所本の八七と八八の間にあつたものと考ええると、

(東山)

五九おりとらば

←

六〇ちはやぶる

←

六一よるべなみ

(小相)

六一おりとらば

←

六二ちはやぶる

←

六三よるべなみ

となり、東山御文庫本も小相公本も「おりとらば」の歌よりは前、「よるべなみ」の歌よりは後に、「ちはやぶる」の歌が置かれていたことになる。このように考えれば、「ちはやぶる」の歌がこのような場所にあることも、ほぼ説明がつくのではないだろうか。

東山御文庫本の五八以降の七首の歌は、原拠をたどっていけば古今集・後撰集に行き着くのであろうが、以上のような考察によれば、古今集・後撰集から一首ごと直接に補われたものとは考えにくく、小相公本と何らかの関係があるであろう業平集、あるいはそこまで限定しないにしても他の業平集などからまとめて補われたものと考えておくべきであろう。

#### 四 結び

以上の考察により、西本願寺本系業平集と東山御文庫本業平朝臣集の関係、東山御文庫本の性格を次のように考えることができる。

①東山御文庫本は、西本願寺本系の本から派生したものであり、古今集・後撰集によって二首の歌を補い、詞書を改訂したものであるというこれまでの通説は、大筋において認められる。

②しかしながら、現存の形で比較した場合、西本願寺本より

も東山御文庫本のほうが原形を保存していると考えられる箇所も少なくない。

③②のことから西本願寺本についても、現存のものが決して原形ではなく、かなりの改訂の手が入っているものとして見る必要がある。

④東山御文庫本の巻末七首の増補歌は、古今集・後撰集によって一首ごとに増補されたのではなく、他の業平集との校合によって、原東山御文庫本にはなかった歌を補ったものと考えられる。

⑤④の校合に用いられた業平集は、現在では御所本にその一部をとどめる小相公本と何らかの関係がある本である可能性が考えられる。

東山御文庫本はこれまで、西本願寺本の改訂版という位置付けで見られることが多かったようであるが、ここで考察した通り、この集が西本願寺本よりも古い形を保存していると思われる箇所が少なくないこと、また、前稿<sup>二四</sup>で考察した通り、顕昭『古今集注』で言われる「業平集」がこの系統に近い性質をもっている可能性が高い点などからすれば、この集の位置付けは、単に西本願寺本の改訂版であるにとどまらない。西本願寺本や在中将集の位置付けを考えるうえで、重要な資料の一つとなり得るのではないかと思われるのである。

【資料1】東山御文庫本・在中将集・西本願寺本の詞書の比較

東山御文庫本	在中将集	西本願寺本
<p>(一) 大原野へまで□</p> <p>(二) 桜のさかりにひさしう……</p> <p>(五) 三月つごもりばかりにふぢの花をあ めのふるひ人のもとにつかはすとて</p> <p>(二四) 返し女にかはりて</p> <p>(二五) ありきいたくすとて……</p> <p>(二七) 五条のきさきの宮のにしのたいなる 人に……</p>	<p>(一) 大原野へまうで給へる日</p> <p>(二) さくらのさかりにひさしう……</p> <p>(五) 三月つごもり許にさくらの花を雨の ふる日人のもとへおりてたてまつる</p> <p>(二六) 返し女にかはりて</p> <p>(三五) ありきいたうすとて……</p> <p>(三七) 五条のきさいの宮のにしのたいなる 人に……</p>	<p>(一) 大原野にまで給ふに</p> <p>(二) 桜の花ざかりにひさしく……</p> <p>(五) 三月のつごもりにふぢのはなを人に つかはすとて雨ふる日</p> <p>(二四) かへしをんなにかはりてなりひら</p> <p>(二五) あるきいたくすとて</p> <p>(二七) きさいのみやの五条のにしのたいの にしのつまにすむひとを……</p>

……ほかへまかりにければものもえ  
いはで……

(二二)

御こ返しをたまはせざりければ……

(二三)

五条わたりに人をかたらひてかよひ  
侍しに……

(二四)

いとわりなくしてあひし口はへりけ  
る女の……

(二八)

きの有つねがむすめに……

(三二)

……十一日の月もかくれなんとしけ  
るをりにみこゑいていりなとしたま  
ふしに

……ほかへまかりにければ又のとし  
の春……

(四六)

みこ返くめでたまひて返しえした  
まはざりければ

(四七)

五条わたりに人をかたらひてしのび  
ければ……

(四八)

いみじうわりなくてあひたる女

(五二)

紀ありつねがむすめに……

(五六)

……十一日の月いりなむとしけるお  
りみこゑひていりなむとしければ

いきけむかたもしらせずをともせず  
なりにければまたのとしの春の……

(二二)

かへしみこえしたまはざりければ

(二三)

むかし五条わたりにしのびて人をか  
たらひけり……

(三三)

あるひと

(二七)

ありつねがむすめに……

(三二)

……「十一日の……」ナシ(みこ  
のしゑていりなむとしたまふに……

(三八) ぶか草の里にすみ侍て……

(三九) 返し

(四二) 紀のとしさだがあはのすけになりて……

(五二) 世の中をもうして侍し□

(五五) あづまへまかるみちにかきつばたのおもしろかりける所にをりゐて……

(五六) ……ふねにのらんとするに……

(六二) 深草のさとにすみけるを……

(六三) 返し

(六五) 紀のとしさだが阿波介になりて……

(七八) 世中を思うして

(八〇) あづまのかたにまかりけるにかきつばたのおもしろかりけるを見て木のかげにおりゐて……

(八一) ……舟にのらむとするに……

(三七) むかしふかくさといふところすみける……

(三八) といひければをんな

(四〇) 紀のとしさだがあわのかみになりて……

(五三) 世をなげきはべりて

(五六) あづまのかたにともだち二三人ばかりさそひてまかりけるにかきつばたのいとおもしろくはべりけるをみて木のもとにおりゐて……

(五七) ……舟にのりてわたらむとし侍るほ

(五七)	わづらひはべりていまはかきりと思ひはべりて
(八二)	わづらひて今はかきりとおほえければ
(五八)	やまひしてかきりとおもたべしに人につかはしける
どに……	

(注) 縦に並ぶものが同じ歌の詞書である。

【資料2】東山御文庫本巻末部の他集との比較

東山御文庫本	(五八、五九) ちりぬればこふれどしるしなき物をけふこそさくらおらばをりてめ	小相公本	(八二、八三) ちりぬればこふれどしるしなきものをけふこそさくらおらばおりてめ返し	在中将集	(八) ちりぬればこふれどしるしなきものをけふこそさくらおらばおりてめ	勅撰集	(古今 六四、六五) 題しらず よみ人しらず ちりぬればこふれどしるしなきものをけふこそさくらをらばをりてめ をりたらはをしげ もあるか桜花いぎやどかりてちるまでは見む	伊勢物語	
	ちりぬればこふれどしるしなき物をけふこそさくらおらばをりてめ		ちりぬればこふれどしるしなきものをけふこそさくらおらばおりてめ返し		ちりぬればこふれどしるしなきものをけふこそさくらおらばおりてめ		をりたらはをしげもあるか桜花いぎやどかりてちるまでは見む		

(六一)

よるべなみみちこ  
そとをくへだてつ  
れ心はきみがかけ  
となりなき

(一〇六)

よるべなみ身をこ  
そとをくへだつれ  
とこゝろはきみが  
かけとなりなき

(六二)

しら雲のやへかさ  
なれる帰やまかへ  
る くもをいにけ  
るかな

(二〇七)

しらゆきのやへふ  
りしけるかへるや  
まかへる くもお  
ひにけるかな

(六三)

おなじこと侍にし  
しがにまかりて  
世のなかをいとひ  
がてらにこしかど  
もうき身は山のな

(九七)

おもふ事侍しにし  
がにまかりて  
よの中はいとひが  
てらにこしかども  
うきみながらの山

(三九)

思ことありてしが  
にまかりて  
世中をいとひがて  
らにこしかども  
うき身は山のなかに

(古今 六一九)

題しらず

よみ人しらず

よるべなみ身をこそ  
とほくへだてつれ心  
は君が影となりなき

(古今 九〇二)

寛平御時きさいの宮  
の歌合のうた

在原むねやな

白雪のやへふりしけ  
るかへる山かへるが  
へるもおいにけるか  
な

(後撰 一一三三)

思ふ事侍けるころ志  
賀にまうでて  
世中をいとひがてら  
にこしかどもうき身  
ながらの山にぞ有り

かにぞなりける	(六四) 仁和のみかどせり 川の行幸にたかが ひにてかりぎぬの たもとにつるのか たをゑにかきつく る おきなさび人など がめそかりごろも けふばかりとぞた づもなくなり	にぞありける	(一〇九) 仁和のみかどのせ りがはの行幸にた もとにつるのかた をえりてかきつく おきなさびひとな とがめそかりごろ もけふばかりとぞ かりもなくなる	ざりける	ける	(後撰 一〇七五、六) 仁和のみかど嵯峨の 御時の例にてせり河 に行幸したまひける 日 在原行平朝臣 (一〇七五歌 略) おなじ日たかがひに てかりぎぬのたもと につるのかたををぬ ひてかきつけたりけ る おきなさび人などが めそ狩衣けふばかり とぞたづもなくなる	(一一四段) むかし、仁和のみかど、芹河に 行幸したまひける時、今はさる こと似げなく思けれど、もどつ きにける事なれば、大鷹の鷹飼 にてさぶらはせたまひける。摺 狩衣のたもとに書きつけける。 翁さび人などがめそ狩衣けふば かりとぞ鶴も鳴くなる おほやけの御気色あしかりけり。 をのが齢を思けれど、わかゝら ぬ人はきゝおひけりとや。
---------	---	--------	--	------	----	---	---

〈注〉

(一) 藤原為教筆本は、

飯田季治『評釈業平全集』(明治四〇 如山堂書店)

において校合に用いられた本であるが、現在は所在不明である。

(二) 田中宗作「東山御文庫本業平朝臣集について——新資料紹介と翻刻とを

テーマとして——」(『語文』(日本大学)『一〇 昭和三六・四])

(三) 杉谷寿郎「伝公任筆業平集切と東山御文庫本業平朝臣集」(『和歌史研究

会報』六五 昭和五二・一二)

(四) 前掲注(二)

(五) 渡辺泰宏「西本願寺本三十六人集系業平集——その始発と系統本に關す

る試論——『国語国文』 昭和六二・八)

(六) 東山御文庫本が西本願寺本系から派生したものであることは、右の他に、

片桐洋一『伊勢物語の研究(研究篇)』(昭和四三 明治書院)

福井貞助『伊勢物語生成論』(昭和四〇 有精堂)

においても言及されている。

(七) 山田清市「古今集業平歌の詞書について」、『文学』昭和 四八・一〇)

(八) 但し、西本願寺本系諸本のなかで、群書類従本だけは「旅をしを思ふ」とある。

(九) 例えば、「名にし負はば」の歌(四一一)の詞書には「むさしのくにとしもつけのくにとのなかになりにたりて……」とあり、これまでも問題にされている。通常「むさしのくにとしもつけのくにとのなかになりにたりて……」とあるところである。「しもつけ」とする本文は荒木切のみであるが、現存する古今集諸本のなかに「しもつぎ」として

いる本がある(善海所伝本、基俊本など)があることからすれば、「さ」(字母「佐」)を「け」(字母「計」)と誤写した可能性も考えられる。すると「すみだ河」が荒木切に含まれていないのは、あるいは「しもつけ」の本文を合理化しようとしたものではないかという疑いも出てくる。

(一〇) 本稿において「西本願寺本(系諸本)」は五十八首本を示すものとし、歌数の違う異本は含まないものとする。

尚、西本願寺本の本文は

久曾神昇『西本願寺本三十六人集精成』(昭和四一 風間書房)

により、諸本に異同のある箇所については、その都度示した。

(一一) このように仮定する論は

鈴木知太郎「在中将集の成立について」、『文学』昭和二一・二)

福井貞助『伊勢物語生成論』(昭和四〇 有精堂)

山田清市『伊勢物語の成立と伝本の研究』(昭和四七 桜楓社)

渡辺泰宏「在中将集・雅平本業平集考——その性格と伊勢物語の成立に関する試論——」、『国語と国文学』昭和五八・一二) 「在中将集考——その性格と成立に関する試論——」、『文学・語学』一一二 昭和六二・三)

など、これまでも多い。

拙稿「在中将集の性質と成立」、『国語国文』平成一〇・二、三)

においても、この点に関して考察した。

(一二) 御所本の奥書には、

宝治年中以法性寺少将雅平本書写之、校合了

建長四年以三条三位入道本校合之、奥書入之

建長五年四月廿日授小相公本云入歌了、云他本是也

建長六年正月十七日校合九条三位入道本了、彼本歌四十七首 上輪者九条本歌也

とあり、この本は雅平本に三位入道本、小相公本の二本を校合して歌を補い、さらに九条三位入道本との校合を行ったものであることが知られている。

(一三) 片桐洋一『伊勢物語の研究(研究篇)』(昭和四三 明治書院)

田口守「原撰業平集と類従本業平集の成立と展開——類従本、前田本、相公本を中心に——」、『平安文学研究』三九 昭和四二・一二)

渡辺泰宏「在中将集・雅平本業平集考——その性格と伊勢物語の成立に関する試論——」、『国語と国文学』昭和五八・一二) 「在中将集考——そ

の性格と成立に関する試論——」、『文学・語学』一一二 昭和六二・三）  
など、これまでも多く指摘されている。

(一四) 拙稿「在中将家の性質と成立」、『国語国文』平成一〇・二、三)

(すずき たかし・本学文学研究科博士後期課程)